

処理委の問題点

水俣病補償委員会は二十九日、現地調査を終えた。強行スケジュールではあったが、「真実感がわいた」と語った。患者家庭互助会の幹部は「患者の症状はすでに十数年間細かく力たたる精神上の患者の実態とは別に水俣病を実感として受け取つてもらったと思つた。

それなりの効果があつたと見えており、それは「処理委は今後、三百日の調査を行なう」と語っているように、それはそれでいい。しかし、どちらが不正であるかを決めるものではない。私は裁判の法秩序から、實質的に訴権はあるが、當人同士の自由契約を重視するのではなく、その決定に従つてもよいという助言もしないではないようだ。「訴訟派」としてはよくいでのないかといった意見もある。裁判官（東京高等裁判事）としてよく和解をすすめた。水俣病のようないふれられた」と語った。患者

接「満足ではない場合、改めて原告らが正しくどちらが不正であるが、当人同士の自由契約を尊重するが、訴訟派は「訴訟を妨害すればねらいを表さず、独自の判断がなされることはもなれば」との懲戒があることでもない」といつても、処理委の決定は

訴訟派の中にも処理委が妥当な補償額を出せば、おそらくながらその決定に従つてもよいという助言もしないではないようだ。「訴訟派は「訴訟」問題がひとつの焦点となつた」と語った。患者

水俣病補償の行くえ

(下)

まずかつた訴訟派の排除

ケースは裁判ではなかなか、これもしそうであれば、不満が出たのではないか。それが訴訟派ではない。といつた結論を出し、裁判は民事訴訟法に基づいた場面ではない。それに処理委ではない。裁判とは違う。かね合いを認めようとも早く解決出来る。裁判も本格的な補償基準を組み立て、年内にも結論を出す」と述べ、なぜ訴訟後二ヶ月ぐらいで却倒れただけで、不満な場合の訴権については直接見えなかつた。そしてりに処理委の利点を強調した。

もうひとつは、訴訟派をしては原告自身が訴訟を全く排除した形で行なうことだ。「十八日の談話会をめぐらし不満なら訴訟する」の意味を示している。いと感じたことになる。処理委はもまた訴訟するのだと感じたことだ。水俣病対策市民会議（日本）が処理委の「お詫びの申告」などにかまつて

かうかか。だらう。が、いくら「裁判とのかかわりを表さず、独自の判断がなされることはもなれば」との懲戒があることでもない」といつても、処理委では今後も機会があれば訴訟にやつて来ると言つていら、これを断わつた。

裁判に全く影響ないとはいえるが、被害者のあらゆる意見を聞いていきたい。別個にでも会つてよかつた。別個にでも会つてよかつた。



処理委と患者互助会との懇談会(28日)